

第5章 出土遺物からみた飯盛城跡の曲輪機能

古家百恵・佐藤 凜・新羽坪里花・松下美桜

(大阪府立四條畷高等学校 76 期生)

要旨

昭和 42 年度に飯盛城跡で先輩方が発掘した場所にどのような機能があったのかをリサーチクエスチョンとし、考古学的な手法で遺物の整理を行った。整理した遺物から、発掘場所は位の高い武士達が生活していたと考えた。今後はそれらの遺物と史料を結びつけ、飯盛城全体の曲輪機能を再検討する必要がある。

Abstract

In 1967, Shijonawate high school seniors excavated the ruins of Iimori castle. The research question is “What actions were done in the past at the excavated site?” We are using archaeological methods to organize the artifacts. From looking at the artifacts, we believe that the excavation site was inhabited by high-ranking samurai. It is necessary to continue this research.

1. 序論 執筆者 古家百恵

1-1. 研究背景

近年、四條畷市と大東市は飯盛城跡の調査をおこない、国史跡指定のため国に働きかけた。飯盛城は織豊系山城に先行して、石垣や瓦葺、礎石建物を取り入れた稀有な事例であり、織田信長に先駆ける最初の天下人と評価されている三好長慶が居城としていた。このような歴史的価値が認められ、2021 年 10 月 11 日に国史跡に指定された。両市は三好長慶の動画や飯盛城 3DCG を作成するなどして PR している。このように、四條畷市と大東市が力を入れている飯盛城跡発掘調査を背景に、四條畷高校に保管されていた遺物が注目された。過去に四條畷高校に存在した地歴考古学部は、飯盛山で発掘調査をおこなっており、発掘された遺物や発行されていた部誌が整理されていない状態で地歴教室に残っていた。

1-2. 研究史

昭和 6 年に平尾兵吾氏がまとめた北河内地域の史跡に関する調査には、本丸であるⅡ郭と見られる箇所から「甕、壺、瓦片、土器、刀剣、金具の残片」、「石製の米搗臼」などが出土したことが記されていた。また北側にあるⅤ、Ⅵ郭を北方山頂の防御域であると述べた（平尾 1931）。

平成 25 年発表の飯盛山城跡測量調査報告書には、堀切や曲輪群の位置など飯盛城全体の構造が細かく記されて



図1 縄張り図

四條畷市教育委員会 四條畷市立歴史民俗資料館
大東市 大東市立歴史民俗資料館（2022）
クローズアップ 飯盛城 2022 資料集より

いる。そこでは、中井均氏により南方にある千畳敷Ⅷ郭は北方の曲輪と比べて広大な面積を有しており、山上部に居住空間の存在した曲輪群であると考察されている（中井 2013）。

中井氏の調査に基づいた四條畷市と大東市の教育委員会による測量調査と分布調査および発掘調査では、北エリアは主尾根に築かれた曲輪の面積が狭く起伏が激しいことや主尾根から東西に派生する尾根上に曲輪群が展開していること、南エリアは広大な面積を有する曲輪が築かれていることが明らかになった。このことから、北エリアは防御空間、南エリアは居住空間という機能が想定されることが改めて確認された。

千畳敷Ⅷ郭・Ⅸ郭では、曲輪内で礎石を検出し、日常用具が出土したことから、居住空間としての利用が推定されている（大東市教育委員会・四條畷市教育委員会、2020）。この調査は前述の平尾氏と中井氏の調査結果と合致している。

上記の3つの調査は飯盛城跡の主要部である尾根におけるものであったが、その3つの調査とは別の場所で調査をしたのが四條畷高校地歴考古学部である。昭和20年代に発足した地歴考古学部は、一時休眠状態を経て昭和42年度に飯盛山での調査をおこなっていた。それは主要部以外の東西に伸びる曲輪群におけるものであった。

1-3. 研究意義

研究史でも述べたとおり、四條畷市と大東市が飯盛城の主要部で行った調査結果から、北側は防御・軍事域、南側は居住域との見解がもたれている。そして、地歴考古学部の発掘調査は主要部以外の東西に伸びる曲輪群（城に作られた、土地を平らにした部分）であり、そこはまだ機能が正確にわかっていない。

そこで、リサーチクエスチョンを「当時、飯盛城跡で先輩方が発掘調査をした場所にどのような機能があったのか」とした。また、先程述べた市の見解と、発掘調査の場所から、仮説を「その場所には武士がいて軍事的な役割を果たしていた」とした。

この研究を進めることで、学術に貢献し、市の町おこしに繋げていきたい。

2. 研究方法 執筆者 佐藤 凜

<調査>

2-1. 研究の目的と仮説

過去に四條畷高校に存在した地歴考古学部は、昭和42年に飯盛山で発掘調査をおこなっており、発掘された遺物や発行されていた部誌が整理されていない状態で地歴教室に残っていた。部誌には、トレンチと呼ばれる溝を掘り精度の高い発掘をおこなったことや、遺物出土位置と層位が細かく記録されていたことより、この調査が考古学的な手法を用いた本格的なものであったことがわかる。そのためこれらの資料は、考古学資料として非常に価値があるものとされている。しかしこの資料についてはこれまで詳しい研究がなされていなかった。

そこで、この資料を用いて研究を進めていくこととし、リサーチクエスチョン及び、仮説を上記の通りとした。

2-2. 研究対象と手順

地歴考古学部が昭和42年度に飯盛城跡で発掘した遺物を研究資料とした。地歴考古学部は発掘した個々の遺物をラベル代わりの新聞紙に包み、さらに調査地区ごとにビニールの袋にまとめ保管していた。新聞紙には調査地区名と出土層位番号および遺物番号が記録され、各袋には出土日と調査地区名が記された紙製のラベルがつけられていた。よって以下の手順で遺物の整理および研究を行った。

1. ラベル代わりの新聞紙から遺物を取り出す。



図2 洗浄

2. ビニールのラベルに、新聞紙に記されていた発掘場所を示す記号を書き写す。
3. 遺物を洗浄後、注記する。(図2、図3)
4. 遺物、新聞紙、ラベルをチャック付きの袋にまとめる。(図4)
5. 目録を作成し、分析する。

はじめに新聞紙に包まれた遺物を取り出した。続いて、ビニールのラベルに発掘場所を示す記号を書き写した。そして遺物を洗浄したあと、注記をした。洗浄とは遺物についている土や泥をブラシを使って洗い流す作業で、注記とは遺物自体に先程のラベルに書いた記号を書き写す作業である。

その後、遺物、新聞紙、ラベルをチャック付きの袋にまとめた。そして、整理を終えた遺物を一覧にまとめた目録を作成した。作成した目録には以下の5つ項目を表記した。トレンチでわけた調査地区番号、遺物番号、発掘された日付、層位、および遺物の種類である。また、発掘されたが地歴教室に残っていなかった遺物は備考に欠番と表記した。そして最後に、完成した目録を用いて分析を行った。

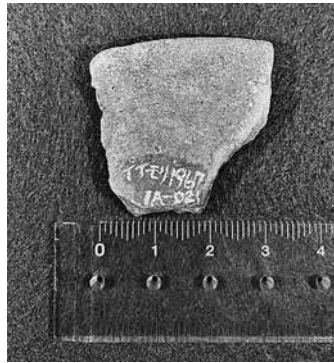


図3 注記



図4 整理

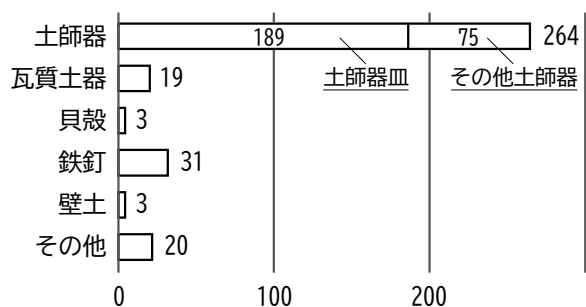


図5 遺物の種類と数

3. 結果・考察 執筆者 新羽坪里花

3-1. 結果

地歴教室に残っていた部誌の記録より、当時の出土数は446点、今回の遺物の整理によって、現在、地歴教室に残る遺物の数は340点であることが分かった。図5は、整理した遺物の種類と数を表す。他の遺物と比べて圧倒的に多い264点の土師器のうち、189点が土師器の皿だった。また、その他の項目の20点の中には、天目茶碗、瀬戸美濃焼の皿、刀の部品などが含まれている。



図6 土師器皿(灯明皿)

3-2. 考察

左の写真に写るのは土師器の皿(図6、本書23頁第7図-4)である。カケラの左下に見える黒いすすは、この皿が灯明皿として使われていた証拠になる。灯明皿は、皿に油を入れ、そこから出した糸などに火をつけ、照明として用いられていたものである。また、灯明皿の他にも、羽釜や甕、すり鉢なども確認できた。

このように、生活的な遺物が多く見つかったことから、発掘場所では人々が生活していたと考えた。

左の写真に写るのは順に切羽と呼ばれる刀の鐔の一部分(図7、本書26頁第10図-78)と、目貫と呼ばれる装飾金具の一部(図8、本書26頁第10図-71)である。

一般的に武士などの戦に従事していたものは武具を用いていたが、戦に従事していない農民などが武具を用いていた可能性は低いとされており、刀の部品が出土したという事実は武士の存在を示唆している。そもそも発掘場所は飯盛城の跡地であり、武士が存在していた可能性

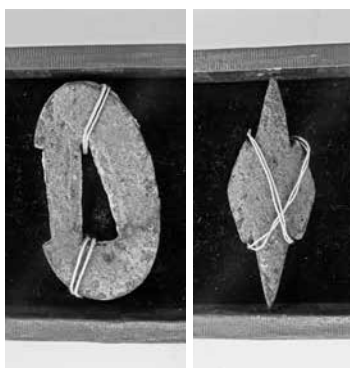


図7 切羽 図8 目貫



図9 天目茶碗

は十分にありと考えられる。以上のように、刀の部品が出土したことから、発掘場所の曲輪には武士が存在していたと考察する。

次に、左の写真に写っているのは天目茶碗の欠片（図9、本書24頁第8図-32）であり、中国から伝わった茶の湯のための道具である。茶の湯は当初は嗜好的なものに過ぎなかったが、後に将軍や上層武家が権威を誇示する場となり、中国から輸入された「唐物」と称する高貴な品々を使って喫茶がおこなわれていた（仁木、1999）。天目茶碗は「唐物」の中でも希少なものであり、足軽などの一般の武士は所有する機会がないとされる。これらのことから、発掘場所では位の高い人物が存在していたと考察する。

4. 結論・展望 執筆者 松下美桜

発掘された遺物から、本研究を進めた曲輪が生活的機能を有していたこと、武士が存在していたこと、天目茶碗を所有することができる程度に位の高い人物が存在していたことなどを考察した。

これらの考察から、曲輪では位の高い武士たちが生活していたという結論に至った。よって、先行研究では本研究の曲輪は飯盛城の北側に位置しており防御・軍事域との見解が持たれていたが、曲輪が軍事的機能だけでなく、生活的機能をも有していたことが考えられる。

このように本研究で導き出した曲輪の機能が先行研究での見通しと異なっていたことから、飯盛城全体の曲輪の機能が先行研究での見通しと異なる可能性がある。そのため、改めて飯盛城全体の曲輪機能を見直す必要がある。今後本研究で整理した遺物と四條畷市と大東市の先行研究により発見された曲輪に関する史料とを結びつけることで、曲輪機能の再検討をおこなうことが望まれる。

謝辞

本論文の作成にあたり、多くの方々のご助言を賜りました。

考古学のことを一から教えていただき、遺物の扱い方や考察の方法、研究発表におけるアドバイスなど、終始適切な助言を賜り、細部にわたり暖かく丁寧に指導して下さいました四條畷市教育委員会スポーツ・文化財振興課實盛良彦さんに心より感謝申し上げます。

同課田中香里さんには、生物考古学という新たな視点からの遺物の見方を教えていただきました。ここに感謝いたします。

滋賀県立大学名誉教授中井均先生には、本研究において大きなヒントとなる助言を頂きました。感謝申し上げます。

元四條畷高校地歴考古学部員の坂元直哉さん、江藤敬直さん、野間康三さんには、当時の部活動の貴重なお話、激励を頂きました。記して感謝いたします。

（原題：昭和42年度飯盛城跡発掘調査を掘り起こそう!! 令和5年3月22日提出）

引用文献・参考文献

- ・四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館・大東市・大東市立歴史民俗資料館（2022）『クローズアップ 飯盛城 2022 資料集』
- ・平尾兵吾（1931）『北河内郡史蹟史話』
- ・中井均「飯盛山城跡の構造」（2013）『飯盛山城跡測量調査報告書』四條畷市教育委員会
- ・大東市教育委員会・四條畷市教育委員会（2020）『飯盛城跡総合調査報告書』
- ・實盛良彦（2021）『「天下の支配者」三好殿 ―考古学から見た天下人三好長慶の軌跡と飯盛城―』四條畷市立歴史民俗資料館
- ・四條畷高校地歴考古学部（1969）『古流 No.4』
- ・仁木正格「唐物の天目茶碗より雑器の美」（1999）『すぐわかる日本の美術』